

万葉巻頭歌の「告らじ」弁護

福 沢 武 一

天皇の御製歌

籠もよ み籠持ち
掘串もよ み掘串持ち
この岡に 菜摘ます子
家聞かな 名告らさね

そらみつ 大和の国は
押しなべて われこそ居れ
敷きなべて われこそ座せ
われこそは 告らじ☆
家をも 名をも

1

これは万葉全巻の巻頭歌です。天皇は雄略天皇に当たります。

世々の学者の研究が積み重ねられた結果、いきつくべきところへいきついている現状だと思われまます。しかし、今後の補正をまだ必要としています。その中でも、さし当たって大きな問題は、末尾に近い「告らじ」の箇所、普通は「のらめ」と訓まれています。いずれを選ぶべきか？ここに本稿も主題を置いています。

まず全体の意味を汲んでみます。

籠を、かわいい籠を手を持ち、
掘り串を、かわいい掘り串を手を持って、
この岡で摘み草をなさる娘さんよ、
あなたの家がどこかを聞きたい、
あなたの名をおっしゃいよ。

前半です。「籠もよ、み籠持ち」と重ね、掘り串も同様に重ねたのは、低姿勢で見も知らぬ娘に言い寄ったのです。「菜摘ます子」にしても、「家聞かな、名告らさね」にしても、思いきり丁寧に出ていますね。

家を聞き、名を知ることは、当時、求婚の常道手段でした。身分を明かすことは承諾を意味しません。そこで娘たちは次のように問い返したもので

☆我許背齒告目 元暦校本・古葉略類聚抄。
我許背齒告自 類聚古集。
我許者背齒告目 神田本以下。
我許曾者背齒告目 金沢文庫本。

した。

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道ゆく人を
たれと知りてか (3102)

そんな気配がこの娘にも見えたのでしょうか、天皇は後半を歌いつぎました。「のらじ」の箇所が通訓の「のらめ」とちょうど逆の意味になります。「のらめ」の方を()の中に入れて通訳します。

ソラミツ、大和の国は

一面に私が治めているのだ。

すみずみまで私が支配しているのだ。

その私は家をも名をも

告げ知らずことはすまい。(告げ知らそう。)

前半とは打って変って、思いきり晴れがましく堂々と宣言しています。娘に名告らせるため、天皇の方から先に名告ったのだとはいえ、そうまで大袈裟でなくていいと思われまます。前半と対立し、ちぐはぐな印象を与えます。この不整合を融和させることはできないものか？

もし融和点があるとすれば、それは問題の「告らじ」の箇所しかありません。

2

あなたは「告らじ」、「告らめ」のどちらをお選びですか？

言っではなりません。どっちだっていい、大して変わりはないのだ、と。全然違うのです。一方は告げ知らず。他の方は告げ知らさない。正反対です。その違いは、実は、反対以上に違うと思うのです。

「のらじ」の訓は大正末年に佐々木信綱・武田祐吉の両氏によって提唱されました。それまでは「のらめ」一色だったのです。

「のらじ」の提案理由は次のようでした。

そらみつ大倭の国はおしなべて吾こそ居れ敷きなべて吾こそ居れと仰せられて、帝王であることを明かにせられた以上、家や名を告らうといふのは、恐らく意義を成さぬやうである。故に類聚古集に従って告自とし、ノラジとして、否定の意志を表すことと解したのである。(武田氏二冊本万葉集新解)

「そらみつ」から「われこそませ」までで天皇の名告りはすんでいます。ですから、「告らじ」でいいはず。しかし、右の提案理由には一番大切なことを見落とされています。「のらじ」が一歌の前半・後半を統合するか、しないかの一事です。それは「のらじ」批判の側も同じです。

ここは文脈からいってもノラジでは不自然です。(久松氏古典読本)

新訓万葉集には……ノラジと訓んでいるが、これも価値なき異訓だから採用しない。(森本治吉氏万葉集の精神と釈義)

「のらじ」と否定に訓む人も最近あるが、恐らく意義をなさぬであらう。(金子氏評釈)

訓としては面白いが、意義の上からは成り立たない。(総合研究折口信夫氏説)

一首の意味の上から見て、「告らじ」と打消するのは不自然と考へられる。(塚本氏通解)
これらは論証ぬきの、印象的な反論にすぎません。ただ一人、松岡静雄氏が文法的に次のように批判しました。

「のらじ」と訓んだ本もあるが、打消を用ひるとせば、ノラネ・ノラズアラメといはねば意が通ぜぬ。(日本古語大辞典)

松岡氏はこう考えたのです。——コソに対し、文末は已然形で結ばなければならない。ところがジは已然形を持たない。そこで代用してノラネ・ノラズアラメを置くべきだ……。

ああ、ちょっと待っていただきたい。僕にも言い分があるのです。

……いくばくも生けらじものを なにすとか身をたな知りて……(1807 高橋虫麿歌集)
など、ジは幾つか連体形に使われています。

……古へも然にあれこそ うつせみも^{つみ}婦を争ふらしき(13 中大兄)

……うべしこそ見る人ごとに 語り継ぎ偲ひけらしき 百代へて偲はえ行かむ 清き白浜(1065 田辺福麿歌集)

これらはコソに対し連体形で結んでいます。主題歌のジはまさにこれらに比例すべきものと考えます。アラネには意志がきいていません。ズアラメ(……ないでいよう)では意も調べも弱すぎます。ジにして初めて尽くし得るならば、われわれの文法こそ謙虚であるべきです。

その後、事態は悪化の一途をたどりました。提唱者が「のらじ」の放棄にでたのです。

告自をノラジと読んで、上に既にこの大倭の国が居処なることを明にしたのであるから我は名告らないの意になる。それも一理あるが、類聚古集は目を自に誤ること多く、……目の初画を誇張して書くことが……自に誤ったものと解すべきであらう。(全注釈)

武田氏はもはや全面的な否定論者にまわっています。それを受けて森本治吉氏が次のように結論しました。

佐々木博士の新訓と武田博士の万葉集新解には類聚古集に「告自」とあるによって「われこそはのらじ」と訓んである。が、諸学者の賛成を得られず、御自身たちも白文万葉集及び新解の改訂版では通説の「のらめ」に従はれたので、この点の異訓は解消してしまった。(精粹)

しかし僕はそうは思いません。ノラジにせよ、ノラメにせよ、一歌全体の統合を保証しない訓釈にくみしたくないのです。

3

僕が万葉集に初めて対面したのは昭和9年、まだノラジが当否を問われている最中でした。僕はほとんど迷いませんでした。次のように考えましたから。

「告げなさい、私も告げるから」では平板

この上ない。お前は告げなさい。「私はこれこれのものだ。だから告げないし、告げるまでもないけれど」といふところに変化がある。自分は告げない。けれど相手は告げずにはすまされない。「そらみつ」以下の荘重な表明がこの主客の対応を自らの勢ひとして感取せしめる。さもなしにはこの表現は力負けといふものだ。(拙著「一愛好家の万葉評釈鑑賞に関する覚書き」)

開卷第一の歌を「のらじ家をも名をも」と訓めない評釈家を哀れむ。なぜとって、彼らは詩を解せないからだ。……念のため意を汲むならば、——大和の国は自分が治めてあるのだ。といへば、家も名も告げるまでもない。だから自分は告げない。が、お前は告げなさい、告げずにはあられない筈だ、といふ心を裏面に感ずる。(同書)

これは自費出版した小冊子の抜記です。時は昭和23年10月でした。

翌年、土岐善麿氏が時流に抗してノラジを支持したことは同志を得た思いでした。ただし、氏の論証そのものには賛しかねました。その要点を書き抜きます。

私解によれば、第一段(前半)を第二段(後半)の序詞的な発想とみるのである。

それ(第一段)は第二段の「われこそは告らじ」をいおうとするためであって、「われこそ」が二つ重なり、それが「われこそは」と特に強めた表現に発展する。この「われこそは」の「は」にも注意しなければならない⁽¹⁾。そらみつやまとの国の領有者・統率者たる地位の自分のはっきりとした意識をもって、天皇の権威、名をも家をもあらためて告げるまでもないという自覚を昂揚したのが第二段の主意であり、同時に一首全体の主意である。こう解するのである。(歌話)

一歌全体を一点に集中したのはいい。しかし、土岐氏のように前半を犠牲にすべきではありません。もっと我慢できないのは、天皇の権威の宣揚だったことです。

開卷第一の雑歌の最初におかれたのは、天皇の権威、皇室の尊厳を発揚する意図に出でたもので……。 (同書)

「雑歌」にこだわることはありません。熱烈な恋歌が並んでいます。額田王の三輪山悲歌(17, 18歌)、蒲生野の相聞歌(20, 21歌)などをご覧ください。およそ邪気のない一歌が主題歌だと考えます。前半は限りなくやさしく言い寄っています。後半が堂々の宣言になったのも、一介の娘に名のってほしいばかりの所行でした。「われこそは告らじ、家をも名をも」を裏返せば、ただちに「家聞かな、名告らさね」そのものです。柔と剛が表裏一体です。統合する故に、一つは他を一層剛に、一層柔にしているのです。その統合は単なる結合でなく、化合であり、昇華です。

4

「告らじ」を中心に述べてきました。対比的に「告らめ」を批判しました。

ノラメは元暦校本の本文に従った井上氏新考の新しい訓で、大方の支持を得てきました。釈義の点で欠陥を指摘したのは赤彦でした。

已に一旦「^{そらみつやまとのくに}虚見津山跡乃国は」云々と御自分を打ちあげ給ひし後に、猶、我こそは自分を告げめと結句して詔ふこと蛇足にして力抜けたる観あり。歌柄全体の勢より察せざれば訓も意も斯の如き取りちがひを生ず。(万葉集雑記)

ワレコソハツゲメ 美夫君志一訓

ワコソハノラメ 折口氏説(総合研究等)

アコソハノラメ 松岡氏古語大辞典

これらは歌調の拙さが加算されます。

ワレコソハセナニハツゲメ(背^{せなにはつけめ}齒^{こそは}告目)旧

訓・仙覚抄(許者)・代匠記(許^{こそは}曾者)

セナは女から男を呼ぶ称で、ここにふさいません。紀州本によって「許^{こそは}曾者」を認めるとしても、ニの訓み添えは苦しい。この一歌には訓み添えがいっさい用いてありませんから。

ワレコソハセトハノラメ 考一訓(我許^{われこそは}曾者背^{せと}登^{せと}齒)

アレコソハセトハノラメ 伊藤左千夫新釈

アコソハセトハノラメ 金子氏評釈

「我許^{われこそは}曾者」の本文を認めるとしても、トハは苦しまぎれの誤写説です。意味は、

我こそおまへの夫と言はう。さうして私の家をも名をも告げるぞ。(全釈)

「お前の夫として」には我慢ができません。鼻

もちならないいや味です。

以上の諸訓も既述の赤彦批判を受けなければなりません。ノラメ・ツゲメを天皇自身の行動とする限りまぬがれない難点です。さらにいえば、この訓に従う時、「私は告げよう」の裏の意を考えた人は一人もいませんが、「お前は告げ知らずことはないのだよ」となるのです。一歌のまとまりは絶対つきません。

ワレコソハセトシノラメ 考・赤彦説（雑記
・歌道小見）

ワレコソセトシノラメ 赤松景福氏創見
吾をこそは夫として住所をも名をも告
しらすべきことなれと也。（考）

ノラメの動作主は娘の方に移ります。次の歌の場合と等しく、「何々してくれ」に当たります。

逢ひ難き君に逢へる夜ほととぎす他時より今
こそ鳴かめ（1947）

この私を夫としてお前は名告れ、と、求めたのです。ワレコソハノラメを批判した赤彦は自説のため次のように弁じました。

抑も此歌の中心は少女に対する「家告らへ名告らさね」の感情にして、結句に再びこれを繰り返して「我こそは」と、力をこめ、それを受けて、「背とし告らめ、家をも名をも」と結びて家と名を告ぐるを促すこそ自然にして生動の趣を備へ感動の中核を歌ひ得つる心地はすれ。（雑記）

中心のとらえ方は適切です。しかし、この訓ならば、むしろ同訓の燈の解の方が自然です。

背としのらめは、背がましくていとをこがましけれど、我よりまづ、家をも名をものらめとおほせられたるにて……。 （燈）

これは考の一訓へ逆もどりです。そこで訓み添えが始まりました。

ワレヲコソセナトシノラメ 僻案抄

ワヲコソセトシノラメ 攷証

ワヲコソセトハノラメ 檜燵手

アヲコソハセトハノラメ 古義……

ワレヲコソセトハノラメ 墨繩

ノラメ（なのりなさいよ）が娘の動作に確定してきます。その際、ヲの訓み添えそのものが問題になります。音調も訓法全体も佳とはいえません。セトシ（お前の夫として）といった押し付け

がましさいいや味です。支持を得ないのは当然です。

最後に、近年有力な訓が見られます。

ワニコソハノラメ 五十槻大人聞書・佐伯氏
説（国語国文五巻六，七号）・沢瀉氏注釈
ワレニコソハノラメ 古典大系本・大野晋氏
説（文学昭和31年）・峯村氏和歌抄・吉永
氏古典とその時代。

意は、私になのりなさい。一歌の眼目をはずしていません。セトシ・セトハ（私を夫として）といったあつかましさいもありません。しかし、ニの訓み添えが矢張り問題です。佐伯氏は「我煮許背」の誤写、沢瀉氏は「我」を「和爾」または「和煮」の誤脱かと推定しています。それは訓み添えを救う途とも思われません。

用字の外に問題がまだあります。「われこそ居れ。われこそ座せ」と堂々の宣言をした直後に、「われにこそは……」と切り返すのは不自然至極です。二つの「われこそ」は無比の格調をなしています。そこへ「われにこそは」はぶちこわしです。「わにこそは」はひどすぎます。「われをこそ」も全く同断です。

二つの「われこそ」に対して同じ「われこそ」である方が調が整ふやうに見える……がこの事は絶対な事ではない。（沢瀉氏注釈）

いや、絶対だ、と、敢えていいたい。「われこそは」の訓が自然至極な措辞なのです⁽²⁾。

そればかりではありません。「私にはなのりなさい」の解は前半の「家聞かな、名告らさね」と矛盾はしませんが、並行して撞着しないだけです。融和統合し、盛り上がるということではなくて終わっているのです。

5

私解の成立中に、学界ではコソ表現に検討が加えられていました。それを全然知らなかったのです、おくればせながら付記しなければなりません。

コソを已然形でうける用法についてははやく石田春昭氏に「コソケレ形式の本義」（国語と国文学，昭和14年2，3月号）の詳論があり、従来この已然形がそれで結ばれると云はれてゐたのに対して、それで切れるのではなしに、下につづく文の逆接的前提となる事

を述べ、近くは大野晋氏が「日本古典文法」(解釈と鑑賞、昭和31年11、12月号)で更にそれらの事を増補詳説されてゐる……。 (沢瀉氏注釈)

たとえば「われこそ居れ」において、係りのコソが文中に置かれたため文末を終止形「居り」とせず、已然形「居れ」で結ぶのだと言われてきました。これが訂正されたのです。文末が已然形であるのは、バ・ドモなどの意を介してつらなっていく文脈の下略と考えたのです。

右の要旨を例歌に即して紹介したい。主題歌の理解を深める結果を期待するのです。古典大系本(二)の補注に沿って記述します。

- (1) ……天つたふ入日さしぬれ 大夫と思へる
われも 敷妙の衣の袖は 通りてぬれぬ
(135 人麿)

(訳) 夕日が射してきたノデ、男一匹と
思っている私も……

大船を荒海にこぎ出でや舟たけわが見し
見らが目見は著しも (1266 古歌集)

(訳) こぎ出して先を進めて行くけれどモ、
私の逢ったあの子の……

コソなしに已然形のヌレ・タケが用いられ
文意は下へ続いていく。後世なら、そこにバ
(ので)・ドモが投入される場所である。

- (2) われこそは憎くもあらめわが宿の花橘を見
には来じとや (1990)

(訳) あなたは私が憎くもございましょうけれどモ、
私の屋敷の……

第二段として、コソが投入され、アラメが
それに呼応し、文意は下へつらなっていく。

- (3) 薦枕相纏きし子もあらばこそ夜のふくらく
もわが惜しみせめ (1414)

(訳) 私が惜しみもしようけれどモ……。

コソに「惜しみせめ」が呼応するが、そこ
で下略になり、係り結びの形が出来あがる。

これが第三段で、余意・余情が宿される。

- (4) しなさかる越の君らとかくしこそ柳かつら
き楽しく遊ばめ (4071 家持)

(訳) 楽しく遊びたいモノダ。

同じ下略でも、そこで強く断止する。

これが第四段で、万葉末期に始まる。

- (5) 石見の海角の浦みを 浦なしと人こそ見ら

め 瀉なしと人こそ見らめ よしゑやし浦
はなくとも…… (131 人麿)

(訳) よい海岸がないと人は見るだろうが、よ
い瀉がないと人は見るだろうが、たとい……

コソに「見らめ」が呼応しているが、ただ
接続に働いているだけである。主題歌の「
われこそ居れ」「われこそ座せ」はこれであ
る。「われこそはのらめ」は(4)の断止でなく、
(3)に近いもの、次の例歌に匹敵する。

- (3)' 遠つ人松浦の河に若鮎つる妹が手本をわれ
こそ纏かめ (857 旅人)

(訳) あなたのたもとを私がまきたいのだけれ
ドモ……。

文末でかききりとは切れず、「まきたいの
だけれど、お前はどうか」と、相手の応答を
待っている。

以上で要旨を終わります。その上で私見を加え
ます。

(3)'は「妹がたもとを纏く」ものとして「われこ
そ」と限定したのです。ここに「お前」を対比さ
せるのは見当ちがいです。語を補えば、——私が
まきたい(けれど、他のだれにまいてもらいた
いのもない)。つまり、だれではなく、「この私
がまきたいのだ」。この意味の、強い断止だと考
えます。

(3)は、——惜しみもしよう(けれど、そうした
人が私にはないので、惜しくもないのだ)。(5)だ
って同じです。「人こそ見らめ」の裏に(けれど
私はそうは見ない)の含みが宿されています。(4)
だって別ではありません。——このように遊びた
い(のであって、ほかのように遊びたいのではない)
。やがて、括弧内を切り捨てて、単純な強調
断止へいくのは自然の勢いというものです。

主題歌の場合を次のように考えます。

「われこそ居れ」「われこそ座せ」の裏には、
「けれど、他のだれが領有しているのでもない」
が意味されています。それは、だれではない、「
この私が領有しているのだ」という強調表現で
あり、強調断止に等しいものなのです。「われこ
そは告らじ」の裏には、「けれど、お前は名告る
べきだ」が歴然としています。それは、「家聞か
な、名告らさね」へ裏側から直結していきます。
その統合は高次です。「おみごと」以外に評しよ

うもありません。

6

ワレコソハノラジの解明を終わりました。一句の果たす役割の大きさに改めて驚きます。前後二段の対立背反を物の見事に統合しているのです。それはまさしく主題歌の要^{かなめ}でした。

この一句は此の歌の全精神の集中した句である。此の歌の生命である。(左千夫新釈)
これは至言です。「われこそは告らじ」にして極言と申せます。それに反し、次の評言に接する時、軽蔑と憫笑を禁じえません。

前後照応せず、疑問の多いものであるが、本来問答体の二首の民謡であったものを結び合せて一首とし、さうしてそれを天皇の御製としたため、幾らかの語句を改めたものとして見れば、疑問は自然に解せられるから、これは決して天皇の御製とすべきものではない。(津田左右吉氏日本上代史研究)

批判の前に必要不可欠なことがあります。それは徹底的な自己批判です。それを怠った時、とり返しのつかない結果をまねきます。自らを誤信へ陥れ、他をも誤謬へ導くのです。

「そらみつ」以下の六句は、天皇としては家をも名をも明かしたことである。それに続く「吾こそは告らめ」は、求婚の意の繰返しと見るべきものであるが、調の上からいふと、繰返しには過ぎる、無くても事の足りるものに思はれる。空白を設けて多くの事を暗示してある巧緻な歌に、何うしてかういふ不自然に似た部分があるのかと疑はしめるものである。(総合研究所収窪田氏説)

当然な疑問で、そこから「われこそは告らめ」の訓の検討へいくべきでした。それを怠って次のような臆説へはまっていきました。

摘み草をする娘は神に仕へる女、天皇は神のうちの神と規定し、この二つの意識が同時に働いて、率然と、「そらみつ」以下の六句となったのではないか。……もしそれだとすると、この一見不自然に見える詞続きは自然なものになるばかりでなく、空白の持つ暗示にもまさった暗示的な、巧緻にもまさった巧緻なものとなって、全体としての調和のあるものとなって来る。(同書)

この神がかりは笑止千万です。

も一つ、ここにふれたい。大野氏のコソ論から導かれた主題歌論です。出典は「日本古典文法」ですが、沢瀉氏の要約によって示します。

従来の解釈によると、「我こそは天皇である」「我こそは天皇である」と断定を重ねて自己を強調する事になるが、それでは「威圧によって少女を従へようとする心が荒々しく現はれすぎるのではあるまいか」と云ひ、従来の解釈では「(菜をお摘みになるお嬢さん)と親しく呼びかけた最初の和やかさは、ここに至って粗暴な宣言に取って代られることになる。このやうな行為すらも英雄的な古代の天皇らしい求愛として容認されるべきであらうか。それは古代の素朴と粗暴とを混同するもののやうに思はれる。」(注釈)

そこで大野氏の選んだ釈文は先に紹介しました。「自分は大和の国を治めているのだが……」という連接でした。借問いたしたい。「そらみつ」以下の表現が強く響いてはどうしていけないのでしょうか？ 強さが荒々しすぎ、粗野・粗暴だと感じるのは、受けとる方の神経が脆弱だったということではあるまいか？

前半は限りなく柔和です。後半は絶大な強さです。二つの対比が無限に深い彫りを一歌に与えています。相反する二つを「われこそは告らじ」が統合して間然するところがありません。

ワレコソハノラジと訓んでも解釈がすらすらと行かない。(大系(一)補注)

この先入観を捨離することから始めなければなりません。

7

上来、訓釈の間に鑑賞にもふれました。もすこしその面を追記したい。

万葉集を繙く人は、巻頭を飾るこの勝れた御製を拝読して、誰しも古代文芸の酌めども尽きぬ豊かな詩味に浸ることの幸福を感じるのであらう。(次田真幸氏評説)

もはや開巻第一歌にふさわしい点は申すに及びますまい。主題歌に関する限り、いかなる贅辞も過褒と思われません。

此御歌善きか悪きかと問ふに面白からずといふ人あり。吾は驚きぬ。思ふに諸氏のしか

いふは此調が五七調にそろひ居らねばなるべし。……五七調以外の此御歌の如きはなかなか珍しく新しき心地すると共に古雅なる感に打たるるなり。(正岡子規「万葉集を読む」)
これは明治33年のことです。当節、子規を驚かすような人もあるまいと思いますが、でも念のため引用しました。後年、諸家も次のように評しています。

自由にして簡古(沢瀉氏講話(二))

音数にも出入があり、そこから一種古朴にして荘重な調が伝へられてゐる。(土屋氏私注)

子規は「古雅」と並べて、も一つの性格を指摘しました。

趣向の上よりいふも……もとよりたくみたる程にはあらで自然に情のあらはるる歌の御様なり。殊に此趣向と此調子と善く調和したるやうに思はる。若し此の歌にして普通五七調にてあらば言葉の飾り過ぎも真摯の趣を失ひ、却って此歌にて見る如き感情は起きぬなるべし。吾は此歌を以て万葉中有数の作と思ふなり。(上掲書)

新しさは型にとらわれぬ点です。それは個性の別名です。音律ばかりではない。構想の上でも個性味豊かです。伝わってくるのは実感そのものです。あるいは天皇その人が作者ではなかったかもしれない。代作歌かもしれない。しかし個性を持った作者を意識させずにはおきません。ただならず鼓動する作者の心意がじかに呼びかけてきます。

先に津田氏の一文を引きました。一歌は問答体の民謡として規定していました。それは津田氏に限った見解ではありません。民謡であり、所作を伴った歌曲が伝承された、——これが通念になっています。僕は敢えて異義を唱えたい。一歌は個人感情を欠く伝承歌謡と思われません⁽³⁾。長年の継承の間にアレンジされたという、そうした通解にも従えません。一歌は渾然と一体化しています。寸分のすきもありません。一気に歌いなされたことを証しています。この格調の高さは一人のもので、余人が手を加えたら、それだけきずになるのです。

伝承歌謡らしい美しさを感じさせるが、し

かも同じくこの天皇の御製として古事記に伝へられてゐる「やすみししわが大君の云々」⁽⁴⁾といふ風な作に較べて、劈頭に「籠もよ」と少女の手にしてゐる籠をまづあげ、次にふくしをあげ、「この岡に」と続けられたところ極めて具体的で、直接的で、むだな説明や抽象的な詠嘆をまじへないで、作者の感動が大胆に率直に歌ひ進められてをり、その素朴な民謡性と共に、作者の力量が感ぜられ、万葉集といふ歌集の巻頭第一を飾るにふさはしい事が認められる。(沢瀉氏注釈)

感動を高く評価する点、全く同感です。それを先に「個性・個人感情」と呼びました。歌調も伝承に終わらず、むしろ感動を盛る新しい革袋だったのではないのでしょうか。

作者の個性が又如何にも明らかに全篇に漲って居る点に注意せねばならぬ。(左千夫新釈)

これにはいささか補正を必要とします。左千夫は個性即性格を意味しました。古事記が伝える雄略天皇の性格です。その躍如たる箇所として次のように評しました。

されば予は先に「吾こそは」の一語此の歌の性命であると断じたのである。のみならず吾こそはの一語は如何にも能く雄略天皇の御性格を現はして居るのである。(上掲書)

僕は歴史上の雄略天皇をしばらくわきに置いて一歌を受けとっています。史料第一を警戒します。史から読む前に、詩から読みたいのです。そうした史ぬきで左千夫の次のきらびやかな評言を借用したい。

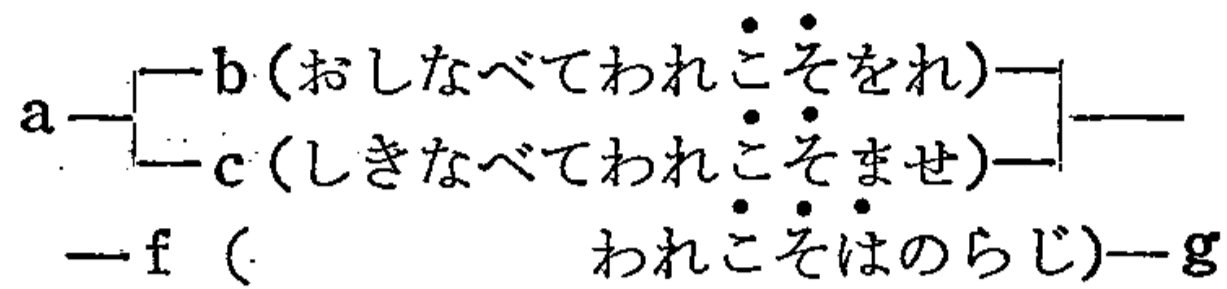
大いなる歌、尊い歌、赫灼たる歌、何とも称賛の詞がないのである。……詩としての形式と内容と実に美を尽し善を尽して居る。(上掲書)

一歌を前にし、予想しないではられません。それは光の中を歩いている作者です。底ぬけの明るさです。思無邪とはまさにこれです。それが自らにして結晶したのが主題歌です。純乎として純なる一歌です。

注

(1)(2) 念のため構成を図示します。

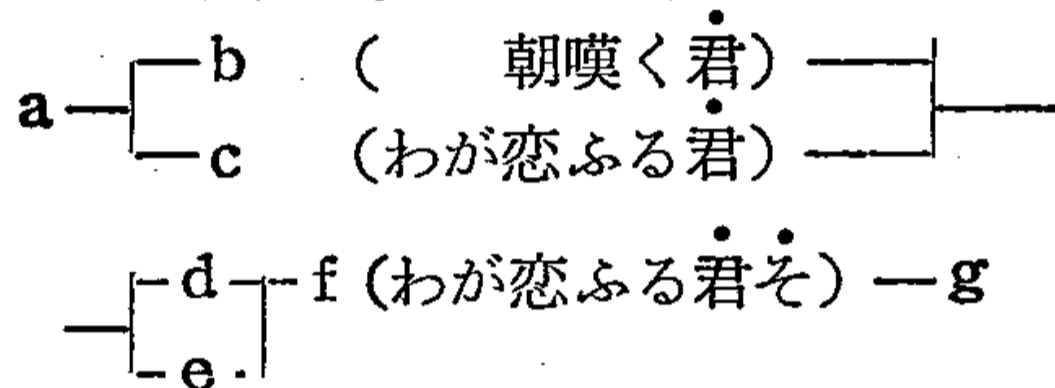
a そらみつ大和の国は b おしなべてわれ
 こそをれ c しきなべてわれこそませ f
 われこそはのらじ g 家をも名をも



b c が並び、その「われこそ」二つを受けた
 f は「われこそは」と強くおいています。

この構成に似た例は次の一歌です。比較の
 ため、これも図示します。

a うつせみし神に堪へねば b 離れゐて
 朝嘆く君 c 放りゐてわが恋ふる君 d
 玉ならば手に巻き持ちて e 衣ならば脱
 く時もなく f わが恋ふる君そ g きぞ
 の夜夢に見えつる (150)



b c を総括したのが f です。その際、d e を
 介して総括したのです。b c の「君」が f で「
 君そ」と強調されるのは主題歌と寸分も違いま
 せん。

- (3) 主題歌が民謡から影響されていることを否定
 はしません。しかし、それを越える独自のもの
 の比重を大きく見るものです。

これは恐らくその時代の歌謡の音律にい
 ろいろの型のあったうちの一つの例であら
 う。もし万葉の時代にその色々の型が五七
 調もしくは七五調に統一されないで持ちつ
 づけられ、発展して行ったら、日本の歌も
 西洋の詩のやうに自由な音律と自由な新し
 さを持った詩形として、成立してゐたこと
 と思はれる。日本固有の詩のために惜しい
 ことであつた。(大成(一)長谷川如是閑氏説)

長谷川氏のいう「歌謡」も個人を無視するき
 らいがあります。対句を愛用することを除け
 ば、色々な型など考えることはないと思いま
 す。一歌はむしろ創作歌です。それが発展され
 ずにしまいました。日本の詩歌のために長谷川
 氏ともども惜しまずにいられませぬ。

- (4) その歌謡を説話ごと引用し、参照に供しま
 す。

ある時、天皇、葛城の山の上に登りいでま
 しき。ここに大猪出でかぶらき。即ち天皇鳴り鏑を
 もちてその猪を射たまひし時、その猪怒りて
 うたき寄り来つ。かれ、天皇、そのうたきを
 畏かしこみて榛の上に登りましき。ここに歌ひたま
 はく、

やすみしし我が大君の 遊ばしし猪の
 病み猪の うたき畏み我が逃げ登りし
 あり尾の榛の木の枝

と歌ひ給ひき。